Ⅰサムエル22章「罪の結果の悲劇」

自分のことを誰も分かってくれないと内向きの思いに凝り固まり、溜め込んだ怒りを誰かにあるいは何かにぶつけるという態度になってしまった経験があるでしょうか。そんな罪の闇の中に留まることがないようにと願います。

１．ダビデは主に委ねて移動（：1〜5）

ガテを離れたダビデは東に、ユダの山地のほうに戻って行き、ガテとベツレヘムの中間あたりのアドラムに行き、その近くの洞穴に避難しました。そのことがダビデの家族に知らされると、家族がみなベツレヘムからダビデのところにやって来ました。ダビデの家族も危険にさらされていると感じたのでしょう。

また、「困窮している者、負債のある者、不満のある者たち」がダビデのところに集まって来ました。訳ありの者たちが集まって来て、約四百人にもなったというのです。そういう人たちの集団をまとめていくには優れたリーダーシップが必要です。ダビデにはそのような能力があったのでしょうし、何より主が彼と共におられたので、その集団を率いていけたのです。そして、この時の人々がやがてダビデの側近としてダビデを支えていくことになります。

人数が増えて大集団になればサウルに知られる可能性があります。ダビデは場所を移動します。また、その移動にはもう一つ理由がありました。年老いた両親を安全なところに住まわせようとしました。

ダビデが行った所は「モアブのミツパ」でした。サウルの手が及ばないイスラエルの外ということ、そして、ダビデの父エッサイの祖母ルツは、元はモアブ人だったということがあったのでしょう。また、サウル王の勢力を弱めるようなダビデ率いる集団を支持することは、モアブにとっても好都合と受け入れてくれるだろうと考えたのでしょう。

ダビデは両親をモアブの王のもとに連れて行き、預けました。その時にダビデがモアブの王に言ったことばに「神が私にどのようなことをされるか分かるまで」とあります。神がみこころに従って人生を導いてくださるとの信仰が表されています。これから先どうなるのか想像がつかないけれども、ダビデは神の導きに委ねていることが分かります。こうして、ダビデたちの集団は要害に留まっていたとあります。

しばらくすると、ダビデにユダの地に戻るようにと導きがありました。5節。預言者ガドがダビデに「ユダの地に帰りなさい」と言いました。ダビデは主のことばとして受け止めて、留まっていた要害から出て、ハレテの森へ行きました。サウルの支配下からしばらくの間離れていたのですが、サウルの支配下に入って行くということです。サウルに見つかる可能性が高くなりますので、そうしないほうがいいと思います。しかし、ダビデは預言者のことばに従いました。それは彼が主の導きに委ねていたからでしょう。主がみわざを行ってくださることを信頼していたからでしょう。

主がみわざを行おうとしておられて、リスクがあると思えるほうへと主が私たちを導かれることがあるのだと思います。主が導かれるなら困難はないということではありません。むしろ困難の中に導かれることもあるでしょう。しかし、その先につながる主の導きがあるのだと信じます。

２．サウルが祭司たちを惨殺（：6〜19）

ダビデたちがユダの地に戻っていくと、案の定、ダビデたちが見つかったことがサウルに知らされました。

6節。サウルが木の下で、槍を手にして座っているというのは、王としての権威を表しており、その場所で会議や裁判が行われました。サウルは家来たちに言いました。7節。サウルはベニヤミン部族の出身で、その側近たちも同じ部族の者たちが多かったのでしょう。ユダ部族のダビデが王となったとしたら、同じように取り立ててもらえる保証はないと家来たちに言います。

8節。サウルは自分の側近たちも信頼できなくなっています。恨み言を言い放ちます。そして、ヨナタンがダビデをサウルに反抗させて、待ち伏せさせていると言います。しかし、そんな事実はなく、証拠もありません。勝手に思い込んでいます。

このようにサウルの疑いは極端になってきて、被害妄想に捕らわれています。周りには息子ヨナタンや多くの家来たちがいて支えているのですが、信頼できずに勝手に孤独に陥っています。主の霊が離れて、神、主に目を向けることができなくなっている結果の状態です。暗闇の中にいるような状態です。

その場にエドム人ドエグもいました。この人は、ダビデがノブの祭司アヒメレクのところに行った時に、ちょうどその場所にいました。そのドエグが、その時のことをサウルに話します。その話には事実も含まれているのですが、悪意が込められています。アヒメレクがダビデのために主に伺ったとは、21章には書かれていません。おそらくこれはドエグの作り話でしょう。主に伺うというのは、戦いに出る前に行われることがよくありました。ですから、その後に言われている、

食料を与えたことと剣を与えたことは事実ではありますが、ドエグの話からはアヒメレクがダビデの戦いに協力したかのように思われます。

このドエグの話はサウルの被害妄想にピッタリ合うものでした。そこでサウルは祭司アヒメレクとノブにいる祭司たちを呼び寄せました。それに応じて、「父の家の者全員」がサウルのもとにやって来ました。サウルはアヒメレクとダビデが協力して自分に対して謀反を企てていると決めつけて、問いただします。

それに対してアヒメレクは答えます。14〜15 節。アヒメレクの答えは、彼が無実であることを表しています。ダビデを弁護し、ダビデが王の命令に従って、目的を果たそうとしていたので、自分はそれを助けたのですとアヒメレクは答えます。そして、「汚名を着せないでください」と訴えます。

けれども、サウルは聞く耳を持ちません。死刑を宣告してしまいます。アヒメレクだけでなくその家族全員を死刑とします。この裁定は全く不当なものです。死刑とされるべき証拠を何もあげていません。

サウルはその場ですぐに近衛兵たちに、祭司たちを殺せと命じました。しかし、家来たちにも不当な裁定であることが分かったでしょう。そして、主の祭司たちを殺すことは主の民にとっては恐れを感じたでしょう。ですから、近衛兵たちは祭司たちに手を下そうとはしませんでした。

するとサウルはドエグに「おまえが行って祭司たちに討ちかかれ」と命じます。ドエグは祭司たちへの敬意も神への畏れもなかったのでしょう。そこに来ていた祭司 85 人を殺しました。それだけでなく、祭司の町ノブの住民をすべて討ち、家畜も殺しました。サウルは落ち度のない祭司の町を完全に滅ぼしてしまいました。

なんという理不尽で悲惨な出来事が起こってしまったのかと、この箇所を読むと陰鬱な気持ちにさせられます。人の罪の結果です。残念ながら、このような出来事はこの箇所だけではありません。歴史上何度もあり、今もこの世界に多くの罪の結果があります。神、主が介入してくださり、早く止めさせて欲しいと願います。神の導きがあるのでしょうか。

３．エブヤタルが逃げて来た（：20〜23）

祭司の町ノブが滅ぼされてしまったのですが、その中から一人の人が逃れることができました。祭司アヒメレクの息子のエブヤタルが逃れて、ダビデのところに来ました。エブヤタルから、サウルが主の祭司たちを殺したことを聞いたダビデは言いました。22 節。ダビデは「私が、あなたの父の家の者全員の死を引き起こしたのだ」と自分の責任だと言います。自分があの時ノブに行ったこと、また自分が祭司アヒメレクにすべてを正直に話さなかったことがこの事件に繋がったと思いました。

この時のダビデが作った詩篇 52 篇を開いてみたいと思います。表題からそのことが分かります。1 節から 4 節には、欺く者、善より悪を愛する者としてドエグのことを語っています。そのような悪者は神に滅ぼされると言います。5 節。それに対して、主の側に立つ者には主の祝福があると信頼しています。8 節。「根絶やしにされる」悪者とは対照的に、「神の恵みに拠り頼む」者は「神の家に生い茂るオリーブの木」のように神の祝福をいただくことができると信頼しています。そのように神の正義と恵みに信頼しているので、必要以上に苦しむことなく、また自分で復讐する思いに捕らわれることがないのです。

そして、ダビデはエブヤタルを保護します。このエブヤタルが祭司として、次の章でダビデの行動を助けていきます。それだけでなく、後にダビデが王となると、エブヤタルは大祭司として任命され、ダビデが死ぬまで仕えていくことになります。

このように、サウルは主の祭司たちを滅ぼしましたが、ダビデは主の祭司を保護しました。このことは言い換えれば、イスラエルの祭司職がサウルのもとから離れ、ダビデのもとに移されたということです。そうして、イスラエルの王権がサウルからダビデに移っていくことが段階的になされていったのです。そのような意味でこの出来事も神の御手のうちにあったのです。

サウルの妬み、怒り、疑いは極端になり、彼は被害妄想にとらわれ、周囲の人々も信頼できず、無実の人々を巻き込んで悲劇を起こしてしまいました。私たちは罪を憎み、悔い改めて、主に向かうことができるように、自分のために、また他者のために祈りましょう。

罪の結果の悲劇でしたが、神、主の救いの計画は段階的に実現されていきました。当事者たちはそれに気づいていません。しかし、主のみわざは進められているのです。私たちの歩みも同じように主の計画の中で導かれているはずです。ですから、私たちは神の正義と恵みが行われることを信頼して、主の導きに委ねて、主の御前を歩んでいきましょう。